いわて高等教育コンソーシアム
The Iwate Higher Education Consortium

第14号
January 2016

NEWS LETTER

～岩手の復興を人材育成から、今こそ連携の力で！～

Index

■ ご挨拶 1

■ トピックス 2～6

□シンポジウム
「これからの『文化財』
ー津波被災地の文化財の
あり方を考えるー」

□いわて学

□ボランティアとリーダーシップ

□いわての大学に行こう！
ーいわて５大学、駅前講義ー

□一関工業高等専門学校
先端科学特別講演会

■ 地域リーダー育成プログラム 7

■ 特別寄稿
「復興へのメッセージ」 8

■ 行事予定 8

いわて高等教育コンソーシアム詳細
http://www.ihatov-u.jp/

ご挨拶

放送大学岩手学習センター
所長　橋本　良二

熱帯多雨林のコンソーシアム

熱帯多雨林のなかに入り上を見上げると、温帯林になじんだ私たちにとって奇妙な光景が広がります。隣り合う木々どうしで、枝葉の重なり合いがありません。樹冠縁の隙間が多角形を描き蜂の巣上に均一に並んでいます。これは、成長競合を経て一部の木が生き残りそれぞれが一国一城の主になった姿で、森林学では排他的な集団と説きます。しかし、こうした木々の排他的関係を部分的に木を伐って崩していくと、残された木は競合を解かれますが、それで楽になるどころかかえって苦境に立つことになります。大風のたびに倒壊していくからです。競合を通して自らを確立してきた個体どうしは、一面排他的ですが、むしろ個性を主張しあう関係として見るべきで、それぞれの個性が強いほど集団の強さ、安定性は高まります。

第1期・2期から第3期へ

いわて高等教育コンソーシアムのこれまでの活動は、文部科学省が推進する事業に合わせて進められてきました。「地域の中核を担う人材育成」をかかげ、平成 20 年度から始まる第 1 期では、組織連携の強化を模索し情報通信技術活用の新しい取り組みが数多くなされました。平成 23 年度からの第 2 期では、震災復興支援をかかげ、めざす人材像をより鮮明にし、一貫して現地重視・実践重視の活動が展開され今日に至っています。平成 28 年度からは第 3 期に入ります。大学と地域とのかかわりにおいてこれまでは距離感をはかりながらでしたが、これからは大学が地域の中枢にあって知力とともに技術力や運動力が求められるなか、人材育成に励むことになります。

個性的地域力の交わり

放送大学は通信制の大学で、学生はラジオ、テレビ放送、またインターネットによる音声・動画配信により学習します。今年度からは、インターネット上で双方向性を活かした課題解答や討論参加を取り入れたオンライン授業が始まりました。こうした流れの先には “MOOC : Massive Open Online Course（大規模公開オンライン講座）” があり、誰でも何時でも何処でも国内外の有名教授の講義が聴けるようになります。MOOC は「知」の解放とも言われ、これからの大学のありように大きな課題を投げかけており、教育（環境）のグローバル化の一端がよく伝わってきます。こうした流れの今だからこそ、大学は個性を磨き、その地にあって地域力をつけなくてはなりません。いわて高等教育コンソーシアムの構成は、高等専門学校、短期大学の参加で 10 校をかぞえるようになりました。各校の個性的地域力の交わりから、岩手の大地と人とともにしっかり歩もうと真摯に学ぶ学生たちの明るい笑顔が見えてきます。

シンポジウム「これからの『文化財』 ―津波 被災地の文化財のあり方を考える―」

いわて高等教育コンソーシアムでは、これまで被災地の復興の度合いに応じて提言型のシンポジウムを開催してきました。

文化庁が掲げる「日本遺産」は、世界遺産暫定リストに記載された文化遺産等の国内外への発信を目的としており、また文部科学省では「文化財総合活用戦略プラン」として、地域に点在する有形・無形の文化財をパッケージ化し、日本遺産への認定に向けて動き出しています。文化財を単体のものという考え方から、“地域で一つのもの”ととらえ直すと、従来は文化財と考えにくかったものにもスポットがあたります。また、こうした動きとは別に、住民目線で文化財を選定していく方法など、さまざまな試みが全国各地で起こりつつあります。

このような流れの中で津波被災地の文化財を考えるとき、流出してしまった有形文化財、人口流出が止まらない中で維持が課題の無形文化財ともに、これまでの文化財保護のあり方では限界があります。国が考えているような新たな考え方や日本各地で展開している住民目線の文化財に対する新しい見方は、大きな示唆を与えてくれるでしょう。

本シンポジウムは、津波被災地の現状をふまえ、今後の文化財の見方と保護のあり方の提言を目的に開催されました。

基調講演「最近の文化財・文化遺産の保存と活用の施策について」

文化庁世界文化遺産アドバイザー
本中　眞 氏

本中 眞 氏のご講演は、このシンポジウムの企画の意図を、見事に踏まえられたものでした。

まず冒頭に、現在文化財保護法の下で保護されている文化財についての説明があり、文化財指定には「文化財が語るストーリーとは一体何なのか」ということが前提としてあり、「人々が残してきた足跡から何を読み取るのか」が常に考えられているということが示されました。そして、文化財保護のあり方が、「個々の文化財が描き出すストーリーの繋がりが描き出すストーリーに注目すべきだ」という方向性になっており、平成 16 年度の文化財保護法の改正によって、「重要文化的景観」というような、それまでの文化財とはまったく異なった制度ができた流れを紹介されました。

そして、こういう一つの場所、あるいは複数の場所を繋げて捉えるという視点は、文化財保護ということだけではなく、各自治体の町づくりにつながっていくということ。つまり、地域の人たちが持っている今までの情報や知識を、しっかりと町づくりの施策に活かして行くことができるわけで、これは文化財・観光といったことばかりではなくて、産業振興にもつながってゆくことであるということを指摘されました。

そして、このことは津波被災地にとっても大変重要なことで、津波被災地では多くのものが失われ、被害があったことを伝えるものも、例えば「奇跡の一本松」のように一部しか残されていないような状況になっています。しかし、そのかけらを大切にしながら、それを繋ぎ合わせて、未来に語るべきストーリーを作り出して行くことが大切であるということを話されました。そして、こうしたストーリーを作ってゆくのは、行政だけでも、研究者だけでも、地域の人だけでもうまくいかないので、これらの人が共同して作り上げてゆく運動にならなければならないという提言を残されました。文化財を保護していくということが、津波被災地の将来に繋がってゆくという、示唆に富んだ講演でした。

平成27年7月11日（土）13:00～18:00 〈於：ホテルルイズ 盛岡市盛岡駅前通7-15〉

プログラム

■基調講演「最近の文化財・文化遺産の保存と活用の施策について」
　文化庁世界文化遺産アドバイザー　本中　眞 氏

■基調報告
1．震災被災地の石碑保存　現状と課題　―山田町の取り組みを例として―
　岩手県立大学盛岡短期大学部教授　松本 博明 氏
2．奄美群島の「シマ遺産」
　奄美群島文化財保護対策連絡協議会会長　中山 清美 氏※
3．“京都をつなぐ無形文化遺産”制度など京都市独自の取組について
　京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課　文化遺産普及・活用担当課長　宮本 博市 氏
4．地域の熱意と汗でよみがえる遠野遺産
　遠野文化研究センター文化課　課長補佐兼文化遺産係長　佐藤 浩彦 氏

■パネルディスカッション
【コメンテーター】前大槌町教育委員会生涯学習課長　佐々木　健 氏
　岩手県文化財保護審議会会長・盛岡大学教授　熊谷 常正 氏
【コーディネーター】いわて高等教育コンソーシアム　地域研究推進委員会
　盛岡大学教授　大石 泰夫 氏

※中山 清美 氏は、体調不良のため、当日はご欠席となりました。

基調報告

京都市文化市民局
宮本 博市 氏

遠野文化研究センター
佐藤 浩彦 氏

文化庁世界遺産アドバイザー本中眞氏の基調講演に引き続いて、４人の報告がありました。

最初は本コンソーシアムの文化財チームも参画している岩手歴史民俗ネットワークの山田町の石碑調査について、岩手県立大学盛岡短期大学部の松本博明氏による報告でした。この調査は被災した石碑の状況調査から始まったのですが、その後町内全域の石碑の悉皆調査へと展開し、一つ一つのデータベース化がはかられています。今までの記録にない新発見の石碑も含めた成果があり、次の段階では報告書をまとめるという計画についての報告でした。

次は、奄美群島で展開している「シマ遺産」についての報告で、報告を予定していた中山清美氏に代わって、シマ遺産についての継続調査をしている文化財チームから、シンポジウムコーディネーターの大石氏が報告しました。このシマ遺産という試みは、集落ごとに自分たちの集落の文化遺産と思うものをリストアップして保護対策協議会にあげて、文化財指定とは違った「シマ遺産」として認めていくというものです。奄美大島の文化財に造詣の深い有志がボランティア的活動で集落をめぐって、地域の人々に聞き書きを重ねて自分たちの周辺の文化遺産を意識させてゆくというあり方が報告されました。

続いては、京都市と遠野市の例を、京都市の宮本博市氏と遠野文化研究センターの佐藤浩彦氏から報告頂きました。奄美大島と違って、こちらの二例は既にたくさんの有形無形の文化財があるうえに、さらにボトムアップで独自に認めてゆくというあり方で、京都市は「京都を彩る建物や庭園」として 236 件、「京都をつなぐ無形文化遺産」として選定されたものは 3 件に上っています。遠野市も「遠野遺産」として 10 年で 141 件となっているということでした。

文化財を守っていくということについて、津波被災地のみならず、今後のあり方に示唆を与える興味深い議論となりました。

熊谷 常正 氏　佐々木 健 氏

松本 博明 氏

大石 泰夫 氏

これまでのシンポジウムをとおして

本年度のシンポジウムは、震災以降地域研究推進委員会が行ってきた調査とその成果の報告のために行ってきたシンポジウム等のまとめにあたるようなものでした。

震災後に行われた文化財・公文書・図書のレスキュー等について検証することに始まり（第一回）、公文書館が県にも市町村にもない岩手県の実情を踏まえ公文書の管理の実態と意義を問い（第二回）、だんだんと一般的な意識が薄れていく中で震災の記録と記憶をどのようにして留めていくのかを考える（第三回）というように展開してきました。

この積み重ねが、今回のこれからの文化財保護のあり方を考えることへ繋がりました。

◆これまでに開催したシンポジウム

第 4 回

第 3 回

第 2 回

第 1 回

開催年度	日　程	テーマ
平成27年度（第4回）	平成27年 7月11日（土）	これからの「文化財」　―津波被災地の文化財のあり方を考える―
平成26年度（第3回）	平成26年 6月21日（土）	震災の記録と記憶をどうとどめるのか　―震災資料の収集保存と活用―
平成25年度（第2回）	平成25年 11月17日（日）	なぜアーカイブズは必要なのか―　文書保存の意義と実態
平成24年度（第1回）	平成25年 3月16日（土）・17日（日）	東日本大震災の検証と来るべき震災の備えへの提言 ―資料保存と救済のあり方から

平成27年度前期「いわて学」
～ 三陸から知るいわて〈いわての復興を考える〉～

宿泊現地講義（大槌町赤浜地区）

宿泊現地講義（釜石鉱山跡）

「いわて学」は、岩手県内５大学による共通授業として、岩手県立大学が主務校となり平成 22 年度から開講しています。

平成 27 年度前期は、「三陸から知るいわて ～いわての復興を考える～」をテーマに、５月 16 日（土）～６月 27 日（土）の 15 回開講（履修登録者 40 名）し、三陸の地域振興に視点をあて、いわて全体の地域特性、魅力、復興についての学びを深めました。

現地宿泊講義（６月 13 日～ 14 日）では、釜石市・大槌町・山田町を訪れ、釜石鉱山の視察や大槌町の旧役場・同町赤浜地区の高台移転現地説明、釜石市役所裏の避難路現地体験などを通じて、被災地で暮らす方々と「いわての復興」への思いを共有しました。

参加した学生からは、「実際に被災地を訪れる、被害状況や復興の現状を体感することができ有意義であった」という意見が多数寄せられ、学生が主体的に復興について学ぶ授業となりました。

グループワークによる検討状況

県立博物館での現地講義

回	日　程	テーマ・内容	講　師
1・2	5/16(土)	○グループワークで考える三陸 ○地誌から知るいわて	岩手県立大学　豊島 正幸
3・4	5/23(土)	○漁業・漁村から知る三陸いわて ○産業・経済から知る三陸いわて	岩手県立大学　豊島 正幸 岩手経済研究所　谷藤 邦基
5・6	5/30(土)	○文学から知る三陸いわて ○現地講義に向けて	盛岡大学　塩谷 昌弘 岩手県立大学　豊島 正幸
7・8・9	6/6(土)	○博物館から知る三陸いわて（岩手県立博物館での現地講義） ・三陸ジオパーク（望月） ・岩手の古代集落（丸山） ・マツリは三陸の希望の光（山屋）	岩手県立博物館 望月 貴史、丸山 浩治 盛岡市立高等学校 山屋 賢一
10・11 12・13	6/13、14 （土・日）	○現地で知る三陸いわて （釜石・大槌・山田周辺での現地講義）	・釜石市　生涯学習文化課 森　一欽 ・釜石市　郷土資料館 ・大槌町　佐々木 健 ・おらが大槌夢広場
14	6/27(土)	○三陸復興に向けた課題 －鉄路復旧からみる－	三陸鉄道株式会社　成ヶ澤 亨
15		○グループワーク（まとめ）	岩手県立大学　豊島 正幸

平成27年度 前期集中講義
「ボランティアとリーダーシップ」

田島弘司先生の「絆・仲間作り」

三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤　聡氏

ボランティア実習での薪割り

「コミもり」での班活動

全員で集合写真

西村千尋先生の「コミュニケーショントレーニング」

前期集中講義「ボランティアとリーダーシップ」は全国の大学からのボランティア教員の協力によって運営され、ボランティア活動に関する知識や技能、リーダーの役割、組織の動かし方などについて学び、様々な状況に対応し得る能力と知見を修得することを目的に、平成 24 年度に開講した特別講義です。

この特別講義は、昨年から夏季集中型のプログラムに変更したことで全国の大学からも参加できるプログラムとなり、全国からいただいた支援をわずかながらではありますが、全国に還元しています。

受講生は岩手大学 19 名、盛岡大学４名、一関高専９名の合計 32 名で、そのほか静岡県立大学、山梨大学、椙山女学園大学から４名の学生が特別聴講しました。

初日は長崎県立大学の西村千尋先生を講師に、「コミュニケーショントレーニング」としてアイスブレーキングを中心とした講義を行いました。また翌日から山田町の陸中海岸青少年の家に会場を移し３泊４日の合宿を行い、四天王寺大学の吉田祐一郎先生による「リーダーシップとボランティア」、上越教育大学の田島弘司先生の「絆・仲間作り」、電気通信大学の山本佳世子先生の「高度情報化とボランティア」、鹿児島大学の肥後祥治先生による「グループワーク」と、それぞれのテーマでの講義が行われました。

また岩手県釜石市の「三陸ひとつなぎ自然学校」の協力のもと、９月５日（土）に丸一日かけたボランティア実習を行いました。実習では、まず三陸ひとつなぎ自然学校代表理事の伊藤聡氏から、震災当日の従業員の避難状況や鵜住居（うのすまい）地区の様子など、実際に震災を体験したからこその生の声を伺いました。

その後、三陸ひとつなぎ自然学校の活動場所である「コミもり（コミュニティ＋森）」の周辺整備や裏山での薪拾いなどを行いました。受講者の意欲的な働きのおかげで、予定していた以上の成果をあげることができました。

今年度はボランティア実習に時間をかけることができたことで、さらにパワーアップした内容となりました。

講義を受講して考えたことを大切にし、被災地を想い続けるきっかけとなることを期待します。

日程	内　容	会　場
9/3（木）	■事前指導・コミュニケーショントレーニング 講師：西村 千尋（長崎県立大学　経済学部　教授）	盛岡市：アイーナ 5F　会議室501
9/4（金）	■リーダーシップとボランティア 講師：吉田 祐一郎（四天王寺大学　人文社会学部　講師） ■ボランティア実習事前講義 講師：三陸ひとつなぎ自然学校　代表理事　伊藤　聡 氏 ■絆・仲間作り 講師：田島 弘司（上越教育大学大学院　学校教育研究科　准教授）	陸中海岸青少年の家
9/5（土）	■ボランティア実習（協力：三陸ひとつなぎ自然学校） ■ボランティア実習フォローアップ（協力：三陸ひとつなぎ自然学校）	釜石市内
9/6（日）	■高度情報化とボランティア 講師：山本 佳世子（電気通信大学　大学院情報システム学研究科　准教授） ■グループワーク 講師：肥後 祥治（鹿児島大学　教育学部　教授）	陸中海岸青少年の家
9/7（月）	■振り返り ■被災地視察（釜石市） 講師：後藤 尚人（岩手大学　人文社会科学部　教授）	陸中海岸青少年の家、釜石市内

いわての大学に行こう！
― いわて５大学、駅前講義 ―

８月11日（火）、岩手県立大学アイーナキャンパス（盛岡駅西口）において、県内高校生の大学進学率向上を目的とする系統別説明会「駅前講義」が実施されました。

今年度は、高校１～３年生 38 名の参加があり、岩手県内５大学の教員から大学における「学び」や将来の進路選択、それに向けた高校での「学び」についての講義が行われ、参加した高校生達は、各系統の「学び」について理解を深めることができました。

岩手県立大学　馬淵 浩司 准教授

富士大学　吉田 信一 教授

受講した生徒からは、「まだ自分の進路がはっきりしていないので、今回の講義を受けて進路選択に役立てようと思った。」「実際に話を聞いてみて、目標にしていることがわかった。」「各大学の講義の系統をもっと増やして欲しい。」等の感想が寄せられました。

平成27年8月11日（火）10:15～15:45〈於：岩手県立大学アイーナキャンパス　盛岡市盛岡駅西通1-7-1〉

実施時間	系　統	講　師	講　義　名
10:15～11:00	人文・教育	盛岡大学 文学部　藤原 正義 教授	中学校国語教員を目指す皆さんへ
11:15～12:00	農学	岩手大学 農学部　木村 賢一 教授	医薬品と食品の機能性に関わる『ケミカルバイオロジー（化学生物学）』－農学部の知られざる魅力－
13:00～13:45	経済・経営	富士大学 経済学部　吉田 信一 教授	企業の社会的貢献
14:00～14:45	医・歯・薬	岩手医科大学 医学部　佐藤 洋一 教授	医療人への道　医系大学で学ぶこと
15:00～15:45	ソフトウェア	岩手県立大学 ソフトウェア情報学部 馬淵 浩司 准教授	人口知能って面白い

一関工業高等専門学校　先端科学特別講演会
「超小型EV、PIUSのサスペンションのパテントについて」
「宇宙探査ロボットへの挑戦」

一関高専では、先端的な研究や技術開発に従事している研究者や技術者を招聘して、独創的な研究及び科学技術についての講演を催すことにより、学生に対して理工系の魅力を一層新たにすることを目的とし、毎年先端科学特別講演会を開催しています。

この講演会は一関高専と一関高専教育研究振興会が主催し、一関市と公益財団法人岩手県南技術研究センターの後援で実施しています。

10月22日(第１回)
岩手大学客員教授　小谷 修一 氏

11月26日(第２回)
東北大学大学院工学研究科教授　吉田 和哉 氏

平成 27 年度は 10 月 22 日に「超小型 EV、PIUS のサスペンションのパテントについて」と題して岩手大学客員教授の小谷修一氏を、また 11 月 26 日には「宇宙探査ロボットへの挑戦」と題して東北大学大学院工学研究科教授の吉田和哉氏をそれぞれ講師に招き講演会を開催しました。小谷氏の講演では、自動車のサスペンションの開発の歴史から、現代の主流である形式まで幅広く説明がなされ、さらに PIUS のリアサスペンションの特許取得に至るまでの研究･開発について図解を交え講演が行われました。また、吉田氏の講演では、人工衛星ロケットの打ち上げから、月面探査ロボットの開発まで様々な映像を交えながら説明がなされ、宇宙開発は決して遠く難しいものではなく、手の届くところにあるとのメッセージで締めくくられた講演でした。

なお、この講演会は、いわて高等教育コンソーシアムの遠隔講義システムにより岩手大学に配信されました。

地域リーダー育成プログラム
あなたも「これからの地域社会を担う人材」になりませんか？

このプログラムは、平泉や宮澤賢治らに育まれた共生の思想（人と自然との共生、万物の共生）を尊び、地域全体を思いやるリーダーとして、コーディネート力を備え、多様な領域・局面で地域の中核を担う人材の育成を目指すものです。

いわて高等教育コンソーシアム連携校（単位互換協定校）の学生を対象に、単位互換科目等のコア科目を修めれば「コア科目履修証」を発行し、さらに地域課題解決プロジェクトを遂行して審査に合格した学生には、連携校の学長及び校長の連名による「地域を担う中核的人材認定証」を授与します。

コア科目とは地域課題や復興に関わる５科目（各２単位）のことで、「コア科目履修証」の認定にはこの中から４科目８単位の修得が必要です。

また、地域課題解決プロジェクトは、複数の連携校にまたがり複数名のグループ活動として実施し、担当教員からの事前・事後指導を受けることが条件となっています。

このプログラムの詳細を記載したリーフレットは新入生全員に配布しています。各校の教務窓口にも用意してありますので、お気軽にお尋ねください。

取り組みがスタートしています！
～高校生と大学生等による「地域課題解決プロジェクト」～

地域課題解決プロジェクトの皮切りとして、久慈市の高校生と大学生等による取り組みがスタートしています。これは、久慈市がこれからの 10 年のまちづくりを見据えて策定を進める第２次総合計画のうち、重点戦略“いつまでも住み続けたいと思うまちづくり”に掲げる７つのプロジェクトに対して、若者の立場から意見をまとめ、広い意味での地域課題の解決に取り組むものです。

久慈高校、久慈東高校、久慈工業高校の高校生と、岩手大学、盛岡大学、一関高専の学生が久慈市でのフィールドワークや TV 会議も実施しており、３月には発表会も予定しています。今後の高校生と大学生等の取り組みに注目です。

…特別寄稿…　復興へのメッセージ

上越教育大学　准教授　田島 弘司氏
前期集中講義「ボランティアとリーダーシップ」
2日目担当講師

私は、2012年度から前期集中講義の中の「絆・仲間作り」を担当しています。ただ、残念ながら昨年度は大学のサバティカル制度を利用した世界一周の調査旅行を実施したため担当できませんでした。調査旅行では、5大陸、26か国を訪問しましたが、どの国においても感じたことは、人と人とのつながりの大切さであり、一緒に暮らし共に助け合う仲間がいることの重要性でした。一人一人の力は小さいかもしれませんが、人と人とが強い絆で結ばれ大切な仲間として一緒に生き行動できるようになったとき、何かを変えていける大きな力になっていきます。

それを証明しようとしているのが、東日本大震災からの復興なのだと思います。全国から集まったボランティア教員による本集中講義は、その復興を実現するために必要な地元の人材を養成することを主な目的としています。昨年度からは、集中講義を行う主な場所が盛岡駅前のビルから甚大な被害を受けた陸中海岸線沿いにある「岩手県立陸中海岸青少年の家」に移り、そこに学生たちと一緒に宿泊しながら講義やボランティア活動を行うようになりました。

それは、学生たちにとって、またボランティア教員の私たちにとってもすばらしい経験になりました。特によかったのは、被災地のボランティア活動の中で、現地のボランティア団体の活動拠点の整備の手伝いを学生たちと一緒にしたことでした。そこでは、学生一人一人の素顔を垣間見ることができました。彼らのこれからの成長と活躍を心から願っています。

関西学院大学　教授　畑　祥雄氏
後期集中講義「危機管理と復興」
第13・14回担当講師

社会インフラが不可欠、防災教育と映像活用

「映像時代」とは1970年代に使われ始め、意味はテレビ映像の受動的視聴でありました。しかし、1995年以降インターネットが普及すると「映像時代」は受動と能動の双方向の活用となりその意味は大きく変容しました。

たしかに、「災害映像」を防災に活用することは可能になりましたが、現在、大きな落とし穴に直面しています。

1995年の阪神淡路大震災（1.17）と2011年の東日本大震災（3.11）の16年間に社会のメディア状況は大変容しました。1.17当時の携帯電話の普及率は約13%で写真機能は無く現在に残る写真やビデオは報道機関やプロカメラマンにより撮影されましたが、3.11は被災者の人々が被災現場からリアルタイムに「映像を発信」し、その膨大な「映像記録」は主にYouTube上で多くの人々が国境を越えて防災や支援のために活用してきました。

しかし、「それらの映像」は3.11から5年目を迎え、多くがネット上から消え、「1.17の映像」も博物館などに保管されましたが、整理する学芸員も三代にわたる人事の交代で「お蔵入り」になっています。

「釜石の奇跡」は2004年のスマトラ沖の大津波で一瞬に人々が流される「悲惨映像」を先生が子ども達に見せていました。3.11では瞬時にその記憶が甦り、5分の差で家が流される悲劇から家族を守ったとNHK番組で放送されました。しかし、「スマトラ沖の映像」も重要シーンはYouTubeから落とされ、「3.11の映像」も激減しています。「社会的インフラとしての映像」を保存し活用できる体制を確立し、報道機関が持つ「災害映像」も教育目的での活用については低価格ルールを考えなければなりません。その先頭に立てるのが日本の役割であり、「YouTubeは映像のアーカイブではない」ことを肝に銘じなければなりません。

【特別寄稿について】
この特別寄稿は、いわて高等教育コンソーシアムが平成24年度より新規に立ち上げた特別集中講義で全国の大学からボランティアで講師をご担当いただいた先生方から、「復興へのメッセージ」をテーマに、いわて高等教育コンソーシアム集中講義での担当講義の概要説明や、講義を担当したことで改めて感じたこと、所属大学での復興へ向けた取り組みの紹介、被災地・被災者へ向けたメッセージ等について寄稿していただいたものです。

平成27年度 今後の行事予定

事業内容	開催日	開催場所	対象
第16回　平泉文化フォーラム	平成28年 1月30日～31日	一関文化センター	一般市民
平成27年度 いわて高等教育コンソーシアム シンポジウム 「高等教育機関に期待されるグローバル化への 対応と地域再生への役割について」	平成28年 2月6日	ベリーノホテル一関	教育関係者、一般市民
ヤングリーダーズ国際研修	平成28年 2月16日～23日		交流協定大学招聘学生 12名 いわてコンソ所属学生 18名

発行連絡先
いわて高等教育コンソーシアム事務局
（岩手大学総務企画部総務広報課内）
〒020-8550 岩手県盛岡市上田三丁目 18-8
TEL.019-621-6855　FAX.019-621-6014
E-mail : ihatov5@iwate-u.ac.jp　URL : http://www.ihatov-u.jp/

構成校
岩手大学
岩手県立大学・岩手県立大学盛岡短期大学部・岩手県立大学宮古短期大学部
岩手医科大学
富士大学
盛岡大学・盛岡大学短期大学部
放送大学岩手学習センター
一関工業高等専門学校

平成28年1月29日発行